

## 幕末明治の写真師列伝 第七十三回 武林盛一 その四

前述したとおり武林盛一がスティルフリードに助手として随行し、札幌から函館まで帰路、同行したことが判っている。この時にスティルフリードが撮影した写真は、

「スチルフリート種板調

- 九月十四日 幌別人足小屋 一  
同官員舎 一
- 廿日 札幌メジヨル館 一  
同所ニ而ホンフ器械 一  
運送会所 二  
創成橋ヨリ日高通 一
- 廿一日 創成橋ヨリ南・北・西通 三  
営繕会所 二
- 廿二日 本陣西以南角ヨリ 一  
東京楼 一  
薄野中之町 一  
水車家 一  
檜山通 一
- 廿三日 脇本陣 一  
同所屋上ヨリ継写 七
- 廿四日 竜吐水 一  
土人馬上 二
- 廿五日 豊平川 一  
志村人家 一  
豊平橋ヨリ町家 一  
志村人足小屋 二
- 廿六日 石山 三
- 廿七日 札幌神社 二  
丸山村農家 一
- 廿八日 岡玉村人家 三  
篠路 一
- 廿九日 同 七
- 十月朔日 白石村 四  
豊平橋南ニ而町家 五
- 二日 帰路途中ワッチニ而 二
- 三日 イザリベツニ而土人小屋等 四
- 五日 勇払ニ而一日逗留土人其外景色共 十
- 六日 途中小糸井ニテ景色 四
- 七日 白老ニ而一日逗留土人並景色共 十一
- 八日 出立掛白老ニ而景色 四
- 九日 幌別ニ而出立掛土人共 二
- 十日 景色 一
- 十一日 同所景色 五

(北海道立文書館 簿書〇〇四九〇)

と記録されている。

この時のことは、後年、武林盛一の弟子で武林写真館を引き継いだ三島常磐が、昭和9年(1934)11月6

日付『北海タイムス』掲載の懐想録で、「(前略) 仏人 スツリー・フリュートが御傭となって来札師匠も随行して風景等を撮って歩いたが、その器械は開拓使で買上げ、内半分以上は師匠へ払下げられた。四ツ切レンズ二個、カビネ用一個、暗室外附属品等であった」と語っている。

この時に武林盛一が入手した物は、四ツ切レンズ2個、カビネ用1個、暗室外附属品等であったことがこの談話から判る。また、これらの原写真の一部は、北大図書館北方資料室に所蔵されている。これは、さっぽろ文庫別冊『札幌歴史写真集<明治編>』にも掲載されているのでそちらをご覧いただきたい。

明治6年(1873)、武林盛一は大通西2丁目7番地の宅地に家を新築し、同年(1873)7月に移転している。また同年(1873)11月には開拓使の財政緊縮、人員整理などもあって開拓使官員を辞している。また、亀蔵が結婚した正確な時期は不明ではあるが、東京出身のかねと結婚している。

明治6年(1873)7月28日、札幌で洋学を学ぶ希望を持っていた三島常盤(本名、吉野正治)が父、吉野民次郎の「晩学では成功しまい、それよりも西洋伝来の技術を身につけた方がよくないか」との勧めにより、武林盛一の弟子となる。

三島常盤(吉野正治)は、安政元年(嘉永7年という説もある)8月6日、新潟県刈羽郡二田村の物部神社神官、吉野民次郎の次男として生まれた。吉野家は代々神官を務める家であったが、三島常盤(吉野正治)の父、吉野民次郎はそれを嫌い、慶応の始めに友人と共に江差に出稼ぎに行き、毎年5月から10月までは蝦夷地で過ごしていた。それが慶応4年(1868)10月の箱館戦争で吉野民次郎は帰れなくなって、やむなく蝦夷地で越冬することにして、それを機会に翌明治2年(1869)、後志国余市郡山臼村に移住することにした。明治4年(1871)、吉野民次郎は、札幌の2ヶ所に脇本陣が建設される際に、郷友石黒林太郎と共同でその建設、経営を年二千円の補助金で請け負うように命じられた。ところが明治6年春にこの補助金が打ち切られたので、三島常盤(吉野正治)が北海道に来た時にはすでに余市郡山臼村に戻っていた。

祖父母の元で育てられた三島常盤(吉野正治)は明治5年(1872)に物部神社や三島神社の神官となったが、その頃に吉野姓を三島に改めたといわれている。明治6年(1873)、父親から北海道に来ないかと誘われて、同年(1873)5月に神職を辞して、風呂敷包み一つで父の居る後志国余市郡山臼村に来たのであった。

(森重和雄)